

2014年度 冬季棚田学会発表会

(従来の談話会は 2014年度より発表会に名称変更)

日時 2014年12月13日(土) 13:30 ~ 17:00 (受付 13:00より)

会場 早稲田大学早稲田キャンパス 16号館 306教室

発表① 農村空間における野生鳥獣被害問題への考察 ～全国自治体のサル追い払い犬事業担当者と飼育者の意識調査から～

発表者 山口 薫 氏 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)



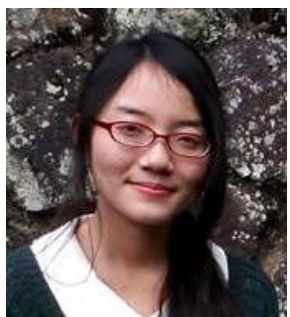
日本航空株式会社勤務後、JAL アカデミー講師
2005年 愛知万博で日本館の教育を担当
2012年3月 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士課程前期修了
現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程後期在学中

発表の概要

農村空間における野生鳥獣被害問題は年々深刻化している。本研究では、住民が犬を活用した取り組みで主体的に活動を行うことが、野生動物との軋轢を軽減し、地域活性化にもつながるという仮説で、住民主体のサル追い払い事業を分析し、効果と課題を明らかにする。三大獣害のうち、シカとイノシシにおいては、消費用の加工工場も設置され、生態系に基づいた技術的対策も一定の効果を上げている。しかし、サルに関しては駆除のみで、殺処分を容認しにくい住民の心理的問題もある。全国の自治体担当者とサル追い払い犬(モンキーダッグ)の飼育者を対象に聞き取り調査を行った結果、犬は最も効果的で、軋轢を軽減し、住民間の交流を促すことが判明した。

発表② 棚田の積石と表層地質の関連性

発表者 西脇 祥子 氏 (三重大学生物資源学部共生環境学科)



1991年愛知県名古屋市生まれ
現在、三重大学生物資源学部環境施設工学研究室に所属
農地の石積みについて学び、棚田や段畑地域を中心に現地調査を行っている
2013年より、群馬県内の集落で石積みテーマにした村興しプロジェクトに参加し、石垣散策マップの作成を担当している

発表の概要

棚田の法面は主に土羽または石積みからなる。だが、棚田の法面工法の選択と表層地質の具体的な関係については、先行研究事例が見当たらない。そこで、棚田百選に認定された棚田の法面工法と表層地質図を比較することで、棚田の法面に選択される工法の傾向を分析した。また、石積みが選択されている地域で利用されている積石にも、表層地質と関連性があると考え、地層地質に変化のある地域として、棚田団地内で三波川帯から秩父帯へ変化する和歌山県有田川町沼を事例に、石積みに用いられている積石100石中の石材割合を分析することで、棚田の石積みで使用されている石材と地表地質の関係を明らかにすることができた。

発表③ 伊豆半島松崎町における桜葉畑景観の成立過程とその変遷・住民による評価

発表者 七海 絵里香 氏 (日本大学大学院生物資源科学研究科)



2010年 日本大学生物資源学部植物資源科学科卒業
2012年 日本大学大学院生物資源科学研究科博士前期課程修了
2013年 「畦畔植生の修復に向けた表土移植手法の検討」で日本緑化工学会ポスター賞最優秀賞(技術報告部門)受賞
2014年 「人里の園芸植物の生態と栽培に関する研究」で日本造園学会奨励賞受賞
現在、日本大学大学院生物資源科学研究科博士後期課程在学中

発表の概要

国産桜葉の産地である静岡県松崎町の桜葉畑景観を事例に、特産作物による特徴的な農村景観について、その成立過程と分布の変遷を明らかにし、さらに住民による桜葉畑景観の評価を調査した。その結果、かつて桜葉は炭焼きによる伐採と連動して生産されていたが、炭焼きの衰退により、畑での桜葉栽培が1960年代末に考案されたことがわかった。だが、今では桜葉畑の分布面積は最盛期から半減した。畑の放棄はアクセス性にあると考えられる。一方、棚田のような条件不利地域の農地の保全機能や有機質資源の地域内循環との結びつきが明らかになった。また、住民の半数以上は松崎町が桜葉生産日本一であることを認識しているが、若者への認知度は低い。今後は桜葉生産に関わる景観に対する価値を生産者、地域住民、観光客が再認識することが重要である。

発表④ 域学連携によるプロジェクト型地域づくり活動の展開

—西伊豆・松崎町石部地区を事例に—

発表者 山本 早苗 氏 (常葉大学社会環境学部)



京都生まれの滋賀育ち
2007年 関西学院大学大学院社会学研究科博士後期課程修了 博士(社会学)
2008~2010年 北京師範大学文学院に高級研究員として留学
2010年 富士常葉大学社会環境学部講師
2014年 常葉大学社会環境学部准教授
「棚田の水環境史 —琵琶湖辺にみる開発・災害・保全の1200年」(昭和堂)、「資源人類学8 資源とコモンズ」(弘文堂)、「環境民俗学」(昭和堂)など著作多数

発表の概要

本発表では、西伊豆・松崎町石部地区におけるプロジェクト型地域づくり活動を事例に、域学連携事業において、いかにして新たなプラットフォームが形成され、地域の担い手の主体性や環境認識にいかなる変化をもたらされたのかを明らかにする。常葉大学は、石部棚田保全ボランティア活動10周年を契機に、従来の援農活動中心のかかわりから、地域の女性たちや次世代リーダーとの協働を通じた地域づくりへと活動の幅を広げ、「ふじとこ伊豆プロジェクト」を立ち上げて、プロセス重視の実践へと転換していった。これまで地域活動の裏方とされてきたアクターが主体となって立ち現れてくるプロセスを提示し、地域個性を生かした域学連携の可能性を論じる。

参加費 : 無料(終了後、近くの居酒屋で懇親会予定 @3500円程度 同時にお申込みください)

お問い合わせ & 参加申し込み : E-mail: tanadagakai@gmail.com FAX : 042-385-1180

TEL : 090-4817-1083 (参加締切: 12月8日)

氏名 会員 学生 一般 発表会 懇親会

連絡先 〒

TEL FAX E-mail